

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	Song Sopheak
学位授与の要件	学位規則第4条第1項・2項該当		
論 文 題 目			
REGIONAL DIFFERENCES IN QUALITY OF PRIMARY EDUCATION IN CAMBODIA: FOCUSING ON INSTRUCTIONAL PROCESS IN URBAN AND RURAL SCHOOLS			
論文審査担当者			
主 査	教授 大塚 豊		
審査委員	教授 河野和清		
審査委員	教授 山崎博敏		
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究の主な目的は、各種要因と児童の学業成績との相関を分析することにより、カンボジアの小学校教育の質を検討することである。そうした要因には、教室での授業の特徴、学校の設備・備品、教育政策、児童の家族の社会・経済的状況といった変数が含まれる。具体的研究課題は、次の4点である。すなわち、①児童の成績にはいかなる学校・家族要因が関係しているか。②教員の教室での実践に対して、児童中心主義志向の教育政策はいかなる影響を及ぼしているか。③授業のプロセスと児童の成績との関係はいかなるものか。④小学校の設備・備品、授業のプロセス、児童の学業成績には地域間格差があるか。</p> <p>本研究のためのデータは、各々が約2か月からなる3回の現地でのフィールドワークを通じて収集された。データ収集方法は、①校長、教員、児童への質問紙調査、②児童の学力測定のための試験実施、③教員へのインタビュー、④教室での授業過程のビデオ録画とその分析、である。調査の過程では、調査対象の2地域で無作為抽出された16校ずつ、合計32校の第6学年の児童1,080人に対する質問紙調査と、算数および国語（クメール語）の試験が実施された。同試験問題は、調査対象校の教員、各教科の主任教員、および本研究者によって共同で作成された。学校の設備・備品および教育・学習条件に関する情報は、調査校児童の学級担任および校長から収集され、さらに、6年生担任の計30人の教員がインタビューに応じた。加えて、対象2地域の391人の教員が、新たに導入された教授法である児童中心的アプローチに関する彼らの考え方と実践について、質問紙調査に回答した。さらに、4人の教員による計12回の算数の授業（教員1人当たり3回の授業）がビデオ録画され、その内容が分析された。</p> <p>本論文は序章、本文6章および結論から構成されている。本文第1章では、小学校レベルの教育実践、就学状況、成果に関して概括的に言及された。第2章では、学習成績の向上に寄与する学校および家庭関係の要因の解明が行われた。第3章では、小学校での児童中心主義アプローチに関する政策の実施と教室での授業実態へのインパクトが調査された。第4章では、ビデオ録画内容のコード化・分析に基づいて、教室のスペース、児童の集団活動、教材、算数教育の内容構成をはじめとする種々の側面について分析・記述された。第5章では、授業中の、①教員と児童の会話の構成、②言葉のやりとりのパターン、③教員による発問の認知的領域の</p>			

内容分析、という3側面に着目することにより、教室内での言語コミュニケーションが解析された。第6章では、授業過程の特徴と児童の算数の成績との関連について解釈が試みられた。

以上の各章での考察を通じて、第一に、学校内の諸要因が学校外の要因に比べて、より大きな影響をカンボジアの小学校児童の学習に及ぼしていることが明らかになった。この発見は、児童の学業成績を上げるために学校の設備・備品の改善を目指す政策を支持する拠り所となろう。具体的には、児童の成績に著しい影響を及ぼす学校の側面として、教員の経験、教員の手引き書、授業時数の重要性が明らかになった。児童は、より経験豊富な教員、教員のための手引き書の存在、そしてより長い毎年の授業時間数によって、好成績を収めうるのである。また、学校外の学習活動に関して、個人教授が成績に大きな影響を及ぼしていることも判明した。

第二に、教育政策とその執行との関係に関して、児童中心的な教授法改革が教員の実際の授業では限られた効果しか有していないことが明らかになった。教員は、単に児童中心的教授法のいくつかの表面的な側面を取り上げ、既存の実践に取り入れていた。政策では児童の考える力に力点が置かれているのに対して、教員は自らの教授行動のごく一部を変えるだけに留まっていた。教員は児童がより多くの活動を行うことを許容し、教室により多様な教材を導入することを奨励されているが、実際にはほとんど行われていなかった。

第三に、教授・学習過程のレベルでは、Hiebert、Wearne、Stein、Flandersらの先行研究の枠組みを援用して考案した手法を用いて、2つの重要な側面、つまり、①授業中の発問を含む課題の提示、②教員と児童との言葉のやりとりが、特に児童の成績と強い相関があることを解明した。授業中に多くの課題を与え、しかも計算問題、具体性のある問題、文章題といった多様な形式で課題を与え、「なぜ」「いかに」を尋ねるなど、より高度な発問を行い、児童が問題に対する自らの意見を明確にし、解決策を入念に考え出すように導くタイプの教員に教えられている児童は、そうでない教員に教えられる児童に比べて、調査対象校で共通に実施した試験の結果から測定しうる範囲内で、より優秀な成績を挙げている。

第四に、試験の得点で測定される教育の成果は明瞭な地域差を示した。都市の児童は農村の児童に比べて高い得点であった。都市の児童のこの優れた成績は、児童の成績との著しい相関が示された教員の経験、授業時数、教材に起因するものであった。都市の児童の好成績に対する別の解釈は、彼らの家庭が農村児童の家庭に比べて豊かであり、それに伴って個人教授を受ける機会の多さが、成績の重要な決定要素であることを示唆しているというものである。

本論文は以下の点で、学術的な価値を有すると言える。

第一に、質問紙調査、インタビュー、授業分析など、利用可能な多様な方法による現地調査に基づき、未だ先行研究が乏しいカンボジア初等教育の実態を浮き彫りにした。

第二に、分析の難しさからブラックボックスになりがちな実際の授業過程の、学業成績に対する効果を測定するため、長時間にわたる授業のビデオ録画を、先行研究の枠組みや手法をカンボジアの文脈に合わせて改訂した独自の手法でコード化し分析して、地域間格差をはじめ、一定の結論を得たことは、事例研究として貴重な貢献である。

第三に、本研究で明らかにされた問題点は、今後カンボジア国の教育行政による政策立案に際して、改善に役立つ知見を多く含み、学術的価値とともに実践的価値も有する。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成26年2月10日